

教職員研究チーム活動状況報告書

代表者の所 属・職・氏名	県立いなみ野特別支援学校 職・氏名 教諭 宮澤 賢二	研究チーム名 (高等学校との交流及び共同学習についての研究)
-----------------	-------------------------------	-----------------------------------

研究テーマ分類番号 (9)

(1) 研究テーマ
高等学校との交流及び共同学習についての研究
(2) 研究経過及び具体的な取組
<p>高等学校との交流及び共同学習について、先進校への視察や研修会を実施することで、広く情報を集めその実践に学ぶ。そして本校でのよりよい交流及び共同学習のあり方や具体的な実施方法などについて検討する。また同時に、高等学校への特別支援学校分教室設置に向けた課題についても整理し検討する。</p> <p>1 高等学校との交流及び共同学習の計画実施。</p> <p>本校生徒会との交流（農業クラブ）を続けている県立農業高等学校と初めての共同学習を計画実施したほか、近隣の高等学校との交流及び共同学習を実施した。</p> <p>① 県立農業高等学校との共同学習</p> <p>日 時 10月28日（金） 9：40～11：45</p> <p>場 所 県立農業高等学校 農業科ほ場</p> <p>参加者 県立いなみ野特別支援学校 高等部2年生10名 県立農業高等学校 農業科2年生15名</p> <p>内 容 軟弱野菜の定植（作目 キクナ、ミズナ、チンゲンサイ、コマツナ） サツマイモの収穫</p> <p>② 県立加古川南高等学校との共同学習</p> <p>日 時 1月16日（月） 10：45～12：30</p> <p>場 所 県立加古川南高等学校（家庭総合実習室、食物実習室）</p> <p>参加者 県立加古川南高校 社会福祉援助技術選択者 3年生 6名 県立いなみ野特別支援学校 高等部2年生 5名</p> <p>内 容 クッキー作り</p> <p>2 先進校の視察</p> <p>すでに高等学校との交流及び共同学習を行っている先進校の授業参観などを通じて、よりよい交流及び共同学習の方法を検討した。</p> <p>7月11日（月） 姫路別所高等学校（姫路特別支援学校分教室との交流及び共同学習） 商業科授業、企業請負作業</p> <p>7月12日（火） 龍野北高等学校（播磨特別支援学校との交流及び共同学習） 総合福祉科授業</p> <p>12月16日（金） 姫路別所高等学校（姫路特別支援学校分教室との交流及び共同学習）</p>

商業科授業、ワークスタディ

3 交流及び共同学習研修会の実施

交流及び共同学習の意義を確認し、幅広い実践例や高等学校への特別支援学校分教室設置に向けた動きなどを研修した。

日 時 8月24日(水) 10:00~12:00

内 容 交流及び共同学習について

講 師 関西学院大学文学部准教授

4 高等学校への特別支援学校分教室設置に向けた課題整理。

上記の実践や視察・研修などを通じて、高等学校への特別支援学校分教室設置に向けた課題について検討した。

5 成果と課題

高等学校との交流という点では、本校の地理的な条件として、近隣の高等学校との距離があるため定期的な交流は難しいのが現状である。年1~2回生徒会が行う県農高との交流以外は、サッカー部などの部活動単位の交流が不定期に行われている。

今回、交流をさらに進めた形で「共同学習」をどのように行うのかを考えると、現実的な移動手段を確保することが先決であった。今回は臨時にスクールバスを利用できたが、本校のように公共交通機関がほとんど使えない地域の学校は、交流の回数や内容に大きな制約を抱えている。

そのような中で、今年度始めて近隣の高校2校と交流及び共同学習を実施することができた。県農高との交流及び共同学習では、本校の作業学習園芸班の生徒が県農高の農業科の定植作業を共に行ったが、通常の作業の時間に行っている定植作業とほぼ同じで、後半のサツマイモの収穫とあわせ、本校の生徒にとってとてもわかりやすい内容であり、普段と違う環境でありながらも十分力を発揮できたように思う。はじめ高校生と顔を合わせたときは、かなり緊張気味だったが「高校生と同じ作業を行った」ということも参加した生徒にとって大きな自信となったようだ。単発ではなく、こうした学習を継続することがさらに大切である。

高校への特別支援学校分教室設置の先進校である姫路別所高校（姫路特別支援学校分教室）の公開授業や報告会に、7月と12月の2度参加した。高校内での交流及び共同学習は同じ「文書作成」のパソコンを使った授業であったが、高校生の分教室生徒へのアドバイスの仕方やタイミングが、2度目の方がかなり上手になっているのが印象的であった。時間の経過とともにしっかりと「内実の伴った」交流が出来ているように思う。2校が双方の生徒の成長を実感しながら、緊密な連絡を欠かさずに手を携えて実践を積み重ねている様子がわかった。

しかし高校内の分教室という環境を考えたとき、さまざまな問題が予想できる。高校に通っているのに「高校生でもなく、特別支援学校の本校生でもない」彼らが、高校生の生活を横目で見ながら、自らの障害を受け止め、これからの人生を考える貴重な3年間をどのように過ごし、彼らなりのアイデンティティを確立するのかという大きな課題があるように思う。簡単には結論が出ないが、先進校の実践を参考にしながら、これからさらに検討していく必要があると感じた。